

第2回 作詞作曲者の憧れから 生まれた「学園ソング」

昭和37年、のちに舟木一夫となる上田成幸少年は、故郷の愛知・一宮から上京し、縁あって作曲家・遠藤実のもとでデビュー前の歌唱指導を受けていました。

その3年前には、やはりコロムビアでのデビューをめざしていた中学生、橋幸男（のちの橋幸夫）少年も遠藤学校に籍を置いていたことから、世が世なら「舟木一夫」という芸名は橋がつけていたかもしれない、というエピソードは、昭和歌謡番組が増えたおかげで、けっこう知られるようになりました。ちなみに、その後コロムビアからデビューを飾る青春歌手の梶光夫、安達明も遠藤門下生でした。

舟木のデビュー曲『高校三年生』の発売は翌年（昭和38年）6月ですが、録音されたのは、まだ現役高校生の頃で、伴奏との同時録音形式として、最後の作品だったそうです。病弱だった作詞の丘灯至夫同様、遠藤実もまた、舟木が「僕らフォークダンスの手をとれば」と歌う世界

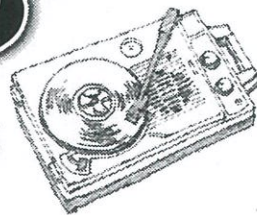
とは全く無縁の青春時代を送っています。

遠藤は、今の学校制度に置き換え

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦



ると中学2年までしか学校に通えず、新潟で工員として働き、17歳の頃は上京して極貧生活に耐えながら「流し」をし始めていた時期に当たります。

そうしたふたりによって作られた「学園生活」は、まさに憧れから生まれた世界でした。

当初、遠藤はこの詞にゆったりとした三拍子のメロディーをつけようと考えていたそうです。しかし、強い憧れは、もっと元気が出て青春を謳歌して歌い上げられるようなものへと曲想を変えさせ、短調ではある

けれど、若者の勢いを感じさせるマ・イチ風な作品に仕上げられました。三拍子にしていたならば、その後に発表された『学園広場』や『星影のワルツ』のような作品になっていたのかもしれない。

さて、ここで現在放映中のNHKの朝ドラ『ひよっこ』の話に移ります。時代背景は東京五輪開催の昭和39年前後から始まり、有村架純演じる主人公が翌40年の4月に高校を卒業し集団就職で上京するという設定なので、主人公は舟木一夫より2学年下ということになります。

そうした時代を意識して、脚本の岡田恵和（昭和34年生まれ）は、往時を思い出させる小ネタを遊び心とともに随所に挿入してくれています。『ひよっこ』の主題歌『若い広場』も、昭和歌謡を熟知している奇才・桑田佳祐が当時の流行歌の要素をたっぷりと盛り込み、なおかつ青春歌謡の王道を行くようなアレンジを施しています。そこに橋・舟木・西郷たちへのオマージュを色濃く感じるのには、私だけではないでしょう。